

<p>団体名</p>	<p>特定非営利活動法人びーのびーの</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>「シェアねっと」/ひとりも取り残さない地域家族コミュニティづくり</p>			
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>			
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>子ども・子育て支援に手も目も力も貸したいという地域の人たちに囲まれ、「子ども1人を育てるには村中のひとが必要（アフリカの諺）」のような社会を改めて取り戻すこと。 未来ある子ども・子育てまんなか社会を目指すことが結果、同時に全世代にとって暮らしやすい地域づくりにし、特別な人の特別な支援としないノーマライゼーションで相互で支え合う社会をつくること。</p>		<p>「よるによる会」 ひとり親家庭、孤食の高齢者、学生、ひろば利用者、地域住民など多世代が参加</p>	 		
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>・支援する人とされる人の階層をつくらず、誰もが等しく必要な時に必要な資源（人も物も情報も）が手に届き、享受しあう関係の中で「おたがいさま」の支え合いの気持ちが生まれる仕組みをつくること。地域の中で常設型で場を開く当団体としてこうした気持ちの循環のHUBとして社会的役割を果たしていくこと。 ・気かけあう社会、地域大家族のような関係性が生まれる活動にしていき、この時期の支え合いが人生100年時代を生き抜く強い地域社会づくりへの突破口となるような活動にしていくことが使命と捉えている。</p>					
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>・数年前からコロナ禍の中でも活動してきたモノの循環と支える関係機関連携があること ・モノの循環を円滑にする人材と広報など活動を広めるための人材などの基盤があること（地域自治会町内会など地縁組織や当法人の登録ボランティアや保育者、ヘルパーなど） ・寄付品や企業支援物資などの提供ツールの強化による安定的供給源のさらなる確保 ・物資の提供活動のみならず相談機能の充実や相互の支え合いの循環づくりや他セクターとの協働実施</p>					
<p>■活動報告</p>			<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>			
<p>●支援内容の希望調査 物資提供支援（シェアねっと）を利用する、主に学童期を持つ子育て家庭に向けアンケートを実施し、これまでの活動の検証と改善すべき点の当事者家庭の実態及び意向を把握した。また、ニーズを踏まえた受取り方法や内容に変更した。</p> <p>●孤食を防ぎ、食を共にする活動 ・物資提供以外の支援として、食を共にする場「よるによる会」を開設した。「シェアねっと」の利用者だけでなく、地域や学生も巻き込み、参加者が主体的に活動し、お互いさまの気持ちが生まれるような場を提供した。 ・また有識者に調査結果を分析してもらい傾向や課題を明確にした。</p> <p>●活動協力者のすそ野を広げる人材育成事業 地域のひとり親等家庭の支援者をメンバーとして事業運営ネットワーク会を発足した。勉強会や意見交換を行って得た内容を、ボランティアの人材育成研修の資料として活用した。</p>	<p>●支援内容の希望調査活動（シェアねっと利用者調査） ①利用者40名対象（対象を利用者・一般→利用者メインに変更） ②目標アウトカム：回答率8割→30名から回答を得られた（8割弱）</p> <p>●孤食をふせぎ、食を共にする活動（よるによる会） ①助成対象期間中盤あたりから月1回開催→中盤前から月1回全9回開催できた ②目標アウトカム：多層化した年代幅での参加者各回平均10家庭→平均15家庭</p> <p>●活動協力者のすそ野を広げる人材育成事業 ①ひとり親家庭支援に関わる方による研修会を全4回開催。ボランティア育成のためにボランティア、スタッフと共有。 ②よるによる会、物品提供先からの配送、配布物資の仕分けのため、参加者、利用者、学生、高齢者含む地域住民や小学校教諭など多様な人々がボランティアとして関わり、人数が2倍に増加</p> <p>●供給資源の保管場所の確保（シェアねっと） ①希望調査を元に物資の保管場所を法人事業所2箇所に設置、地域ケアプラザにも月1回物資を運び受け取り場所を拡大。また利用者が自由に来て物品を選べる環境を確保。 ②月50家庭→60家庭に増加。</p>		<p>「シェアねっと運営連絡会」 ひとり親等に関わる有識者による勉強会 ボランティア育成のため発表内容を共有</p>			
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>			
<p>●シェアねっとの調査実施でニーズやこまりごとを把握することにより、当初予定していた物資の保管場所確保の計画をニーズを踏まえた設置に変更でき、アクセシビリティや満足度の向上や利用者増加につながった。</p> <p>●よるによる会（食をともにする会）のアンケートの設問内容を工夫する事によって、レポートやボランティア参加を促すことができた。</p> <p>●よるによる会開始前にスタッフとボランティアでオリエンテーション時間を確保し目的を共有することで、参加者が主体的に活動できるような配慮をすることができた。</p> <p>●地域支援者による会を発足し各活動の内容や課題について学びボランティアに共有することで、さらなる支援者のすそ野を広げることができた。</p> <p>●協力いただいていた事業者の物資提供終了や物資配送者の欠員で一時的に困難があったが、広報によって本活動を知り賛同した事業者や地域支援者が提供や配送に手を挙げてくれた。</p>			<p>今年度は支援内容の希望調査や食を共にする会の開設、地域支援者のネットワークをつくり勉強会開催や協力者のすそ野を広げるための活動を実施できたが、課題も明らかになった。子育て家庭の多様な働き方により、現行の開館日時では利用できない層が増加しているため、対応が必要である。 また助成金の1年目後半には、配布物資の定期便の搬入ができなくなり、安定的な物資調達課題が浮上したため、定期的な受け入れの仕組みを整えることが重要であると把握した。さらに、食をともにする会（よるによる会）初年度は月1回のイレギュラー開催であったため、家庭側の定着度を高めるためには、開催頻度を上げる必要があると認識した。</p>		<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>	<p>この1年間の活動を通じて ひとり親支援や学童期のこども支援に関わる多様なステークホルダーとの連携と学び合いそして活動が持続可能ならしめる地域の協力体制 を達成しました。</p> <p>■受益者の具体的な変化（自由記入） びーのびーのからの直接的支援のみならず、その背景に多くの応援者の関わりと触れることでより強固な支えを感じ、受益者の立場から自身ができることを共に考え動ける主体となってきたこと。</p>